



【編集】
富山国際大学
現代社会学部

富山国際大学

東黒牧ニュース

Toyama University of International Studies



青年海外協力隊員を 2 度務めた

西村 一也さん (2010 年卒)

富山国際大学が生んだ国際人の一人である。

JICA の青年海外協力隊員を大学院での修士号取得を挟んで 2 度勤め、最後の赴任地、マレーシアから帰国したばかりだ。

入学した時は、とくに海外を意識していたわけではない。教養ゼミで振り分けられた担当教授、「才田（春夫）先生との出会いがすべての始まりだった」。

2 年生に進級する春休みに、初めて海外に出た。向かった先はサモア。女性の社会進出を支援するためのセンターが出来、この手合いをするボランティアとしてだった。

大学の海外ボランティア実習の一環だった。「学生がまだ集まっていないから参加しないか」と、才田教授に誘われ、実は「なんとなく」の参加だった。

サモアの女性に使ってもらおうと、古いミシンを修理する技術者を補佐する役だった。英語で通訳したり、重いミシンを運んだりした。2 週間の活動の後も、国際大の学生 3 人だけで現地に残ることにした。ホームステイ先の同年配の青年と 4 人で島を回った。不自由な生活の中で、「自分なりのサバイバル術を学んだ」。怖いものみたさに似た感情だったが、好奇心が刺激された 1 か月でもあった。

海外志向に火が付いたのか、翌年はタイ、そして 4 年生の時は、再びサモアでと、異文化体験を重ねた。旅費は全てアルバイトをして捻出した。

周りが就活を始めたころには、青年海外協力隊に入ることを決めていた。現地で隊員の活動の様子を見たり、国際大の授業で元隊員から体験談を聞いたりして、隊員たちが「輝いて見えた」からだった。そして「大学で学んだもので何ができるのか試したかった」。

4 年生春に受けた試験には落ちたものの、2 度目の挑戦で環境教育隊員として合格した。卒論のテーマが「環境教育」だったことなどが理由だろう。

卒業から 1 ヶ月間の技術補完研修と 2 ヶ月間の語学研修を経て、ミクロネシア連邦のポンペイ州に赴任したのは 2010 年の 9 月だった。

州の環境局に配属された。廃棄物処理に関し、学校や地域コミュニティ向けに啓蒙活動を行った。家庭からどれだけのゴミが出て、処理場にどれだけ持ち込まれるのかの調査も受け持った。廃棄物を処理場に持ち込むための入れ物としてビニール袋の代わりに、ココナツの葉で編んだ籠を使うという自らの提案が採用されたのは大きな成果であると自負している。それまで使われていたビニール袋と違い、オーガニック素材であるココナツの葉は自然に戻って行くからだ。大学で学んだものが大いに活かされた 2 年間だった。

帰国後は、北海道にある酪農学園大学の大学院に進み、環境リモートセンシング研究室で 2 年間、リモートセンシングや地理情報システムなどを学び、農学修士を授与された。

そして、2 度目の青年海外協力隊員としてマレーシアのサバ州へ。

パワーアップした西村隊員は、より専門的な知識を活かして環境保全活動や地図作りで貢献した。

そして、今年秋、帰国。今、地元、富山で就職しようと活動中だ。

「これまで吸収してきたものを若い世代に伝えることで地元へ恩返しをしたい」という気持ちからだ。何よりも、米も魚もうまい富山が好きだから。

異文化の中で長年、もまれて成長してきた青年が、富山でどのような活躍を見せるのだろうか。



東南アジア最高峰の世界自然遺産キナバル山に登山した時の様子 2017 年 2 月



サバ州公園局キナバル局にて同僚にリモートセンシングソフトの使い方を指導している様子 2016 年 6 月頃